The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	19世紀インドの記録(1)
Author(s)	バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ; プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラ; 古賀, 勝郎
Citation	印度民俗研究. 1993, 8, p. 57-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

１９世紀インドの記録

(1)

1．バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ

インドの発展はどうすれば可能か

2．プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラ

「アーラメ・タスヴィール」

これは一体どういうことか

農村へのわれらが務め

訳　古賀勝郎

バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ

インドの発展はどうすれば可能か

本日、当地バリヤーの如き小さな町にかくも多数の人士が強い意気込みをもって一堂に会しておられるのを目にして、甚だ嬉しく存ずる次第であります。怠惰この上なきわが国においては、なに事かがなされるということだけでも上出来なのであります。バナーラスの如き大都会においてすら何の動きもないような時代にこのバリヤーで私の目にすることの出来たものはそれだけで大いなる称賛に値するものであると存じます。かような熱意の由ってくるところはなにか、と考えその理由を探してみましたところ、当地ではこの地域の社会全体が一つに堅く結び合っているのが判明致しました。（T. S.）ロバーツ氏の如き県長官（コレクター）がその任に就いておられるでありますから、かようにならぬ筈がございません。アクバル王を生み出した国と時代はアブル・ファズル、ビールバル、トーダルマルをも生み出したのであります。ロバーツ氏をアクバルになぞらえるならば、ムンシー・チャトゥルブジャダース氏及びムンシー・ビハーリーラール氏はアブル・ファズルでありトーダルマルでいらっしゃるわけでございます。譬えて申せば我々インド人は汽車の車輛にあたりましょう。一等車、二等車といったなかなか立派な造りで乗車賃も高額の車があっても、機関車がなければ動き出しません。もし我々インド人を動き出させて下さる方がいらっしゃるのであれば、我々の為し得ぬことは何もありますまい。「何故に沈黙を守るや」と言われるだけで、ハヌマーン猿神は自分の秘めている力を想い起こすことでありましょう。しからば、始動させるのははたしてだれかということであります。王侯貴族であるのか、それともお役人であるのか。王侯貴族は礼拝と飲食、それに無駄話に忙しく、お役人は公用に追いまわされる一方、舞踏会とか競馬、芝居とか世間話とかに暇がないというわけであります。また、たとえ暇が見つかったとしても、我々の如き貧しく不潔な黒んぼ連中と交って貴重な時間を無駄にすることもありますまい。「お前も忙しけりや、わしも暇なし。これじゃ会うこともなし」と言うわけであります。蛙が三匹重なっていた。一番上にいたのが「あゝ良い気持だ」と言えば、眞中にいたのは、「じっと動かず」、一番下にいたのは、「あゝだめだ」と言った。我々一般のインド人はこの一番下の蛙同然であります。

その昔、我々アーリヤ民族がインドに来たり住みついた時にも、王侯とバラモンに種々の学問を栄えさせ、道徳をひろめる仕事が託されておりました。今日でもこの人達がその気持になれば、わが国は日毎の進歩どころでなく刻々と進歩致すことでありましょう。ところがこの人達がありとあらゆる怠惰にとりつかれておるわけでございます。「知者も快楽にとりつかるればその力を忘る」とはよく申したものであります。何故に恥を感じぬのでありましょうか。何一つ持たなかった先祖たちが、野原の木の葉と土の小屋に

座して竹筒を用いて調べた星辰の運行が、１６０万ルピーもするような西洋の望遠鏡で調べた結果でも正しいとされ、また今日、英語教育と世界の進歩とのおかげで幾十万の書籍、幾千の機械が備わっているという時代に我々は役所のごみ車になろうとしているのであります。今は正に進歩発展の競争の世の中であります。アメリカ、イギリス、フランスといった駿馬はみな全速力で駆けております。だれもかれもがわれこそが一番乗りをと考えています。ところがヒンドゥーというインド馬はじっと突っ立って土を掘りかえしているばかりの有様なのです。他はさておき、日本というポニーが息せききって駆けて行くのを目にしても、インドのカチャワールの馬は恥しくさえ思わぬのでありましょうか。今は、一度立遅れたら、如何ほど努力しようとも二度と先に進めぬというような時代なのであります。この混乱の中、この雨の中でも、不運の傘をさし蒙昧の目かくしをつけておる者は神の怒りにふれたとでも申すほかありますまい。

本日は、友人達が、「インドの発展はどうすれば可能か」ということについて話をせよ、と申しました。しかし、小生には更にこれ以上のことは申せません。バーガヴァタ・プラーナの一節に、「うけがたき人の生をうけ、師の恩、神の慈悲を得ながらもこの迷妄の海を渡らぬ者をば自害者と呼ぶべし」とあります。インドは現在正にこの状態に陥っているわけであります。イギリスの御代にあって、ありとあらゆる機会に恵まれながらも進歩を遂げぬとすれば、それは偏に我々の不運であり、天罰と申すべきでありましょう。姑の許しを得て二人だけの部屋に久しぶり夫と逢う場になっても、恥かしさのあまり、顔をあげて見ることも話すこともせぬとあれば、身の不運と言うより仕方ありますまい。夫は明日は再び異国へ旅立つではありませんか。同じようにイギリスの御代にあって、いつまでも世間知らずの井の蛙で大馬鹿で、鳥篭の中に閉じこもったままであるとすれば、自分自身の不運以外の何物でもありません。

おれたちは飯を食うことに忙しく進歩だの発展だのにかかわってはおれぬ。お前達は腹も満たされておるものだからそのような身分不相応な心配が出来るわけだ、と言う人がかなり見受けられます。しかし、それは大変な考え違いであります。イギリスもかつてはやはり同じように飢えておりました。それでもイギリス人は片方の手で飢えをなくすと共に、もう一方の手で進歩の妨げになるものを取り除いて行ったのであります。イギリスにも百姓も居れば、馬車ひき、人夫、御者もおるわけです。どこを探してもみなが満腹しているというようなところはございません。しかし、畠を耕し、種を蒔くかたわらでは、どうして新しい機械や方法を考案して収穫を倍増させようかということも常に考えているわけであります。イギリスでは御者ですら新聞を読みます。主人が車をおりてだれか友人と話しに行けば、御者は座席の下から新聞を取り出す。ところが、我国では、その間、ホッカー（水ぎせる）を吸うておるか、世間話をしておるかがせいぜいのところです。その世間話というのも全くつまらぬものでありますが、あちらではその世間話の中にも国のことを考えておるのです。一刻もいや一瞬たりといえども無駄にはするまいというのがイギリス人の信条なのであります。それにひきかえこの地には怠け

ぶりの立派な人ほど偉い人、高貴な人と考えられる風潮がございます。またその怠惰たるや、マルークダースが「蛇は宮仕えするでなし鳥がお勤めするでなし施し下さるは天の神」と歌まで詠んでいるようなことであります。皆様が御自分の周囲を見渡してごらんになればおわかりになりましょう。職を持たぬ人間がどれほど増えていることでありましょう。仕事という仕事は何もございません。金持の食客になるか、口入れ稼業をするか、金持ちの子弟を食いものにするか、人の金をかたりとるか、この他に金になる仕事というものはなにもございません。貧窮の火の手が上っております。だれかがうまく言ったことでありますが、貧しき者は良家の子女が破れた着物でどうにかして肌をかくそうとするが如くその名誉を懸命に守ろうとするものであります。まさに現今のインドはこのような有様なのです。

国勢調査の報告を見ても判る通り、人口は日一日と増大しているのでありますが、富は減少の一途を辿っております。従って富が増大するような工夫を致さなければなりませんが、それには知識を増さねばなりません。皆様、王侯を頼りにするのはもう止めようではありませんか。パンディットが国の富も知識も増すような有難いお話を聞かせてくれるなど期待してはなりません。我々自身が鉢巻をしめ、怠惰な気分を捨て去ろうではありませんか。いつまでも野蛮人とか頓馬とか腰なしと言われておるつもりでありましょうか。さあ我々もこの競争に負けぬよう駆け出しましょう。これに負けたらもう今度はどういう目にあうものか解りません。「ラーマが再びジャナカ王の都を訪れらるるはいつのこと」ということであります。今度こそ立遅れたら地の底に沈んでしまうのであります。プリトゥヴィーラージを捕えてゴールへ連れて行った時のこと。シハーブッディーンの兄のギヤースッディーンに誰かが、この男は音を聞いただけで見もせずに的確に矢を射るという話でございます、と申しました。ある日のこと皆のいるところで七つの鉄の鍋が矢で射るようにと準備されました。プリトゥヴィーラージはすでに目を潰され盲にされておりました。ギヤースッディーンが声を出して合図すれば矢を射るようにという手筈になりました。宮廷詩人のチャンド・バルダーイーも王と一緒に捕われておりました。そこでチャンドは、「二度となきこの機逃すな心得て一矢で斃せ敵の首」と歌を詠みました。プリトゥヴィーラージはその意を解し、ギヤースッディーンが合図をするとそれを目がけて矢を放ち、射殺してしまったのであります。ちょうどこれと同じことなのです。ただ今、このイギリスの治世のもとにあって、またかほどに発展の都合に恵まれながらも改まらぬとすれば、もはや勝手にしろと言うほかありますまい。改めるべきことも単に一面的なものでなく、百般にわたって改めねばならぬのであります。宗教、家庭の内外、産業、礼儀作法、習俗、体力、精神力、社会、青少年も老人も男子も女子も、貧しき者も富める者も、インドのすべてに、あらゆる階層に進歩がなくてはなりません。たとえ人からはなんと罵られようが、その進歩の道の妨げになるものを取り除かねばなりません。ただ母なる国の窮状にのみ目を向ければよいのであって、世間の人の言葉に耳を貸してはなりますまい。

「不名誉を先に名誉を後になしおのが目標を成就するが勇者なり。事のならぬは愚の骨頂」ということなのです。愛国者と自らを名乗る人には、自己の安楽を、富を、そして名誉を犠牲にして万全の備えをなして立上がっていただきたいのです。瞬く間にすべて順調に進歩するでありましょう。自分達の欠点の根源を探そうではありませんか。あるものは宗教の名をかたり、あるものは習俗の名のもとに、あるものは安楽の名のもとに正体を隠しているのであります。その盗人達を捕まえて引立てましょう。縄を打って牢に入れましょう。極言すれば、皆様の家にだれか男が不届きな行為を致そうと侵入してきたとすれば、皆様は怒り狂ってその男を打ち叩き、力の限りこらしめられるでありましょう。それと同じように皆様の進歩を現在妨げているものの根源を掘りさげてそれを捨て去ろうではありませんか。なにも恐れることはないのです。百人二百人の人が不名誉な目にあい、カーストから放逐され、貧窮し、捕われて、いや命すらも投げ出してはじめて、国は改まるのであります。

ところで、発展とか改革というものは一体全体何のことなのか、なにを善となし、なにを学びとり、なにを捨て去ればよいのかわからぬ、と申される方もいらっしゃることと思います。そこでただ今思いつくままに二、三申上げてみましょう。

あらゆる進歩の根本は信仰であります。従ってまず最初に信仰を高めねばなりません。イギリス人の信仰生活と政道とが一体となっておるからこそ、日一日と進歩をとげているのであります。それはさておき我国のことを考えてみましょう。我国では信仰の名のもとに種々様々の決りごとや社会の仕組、医療のことなどがびっしりつまっているのであります。一、二の例をあげてみましょう。このバリヤーの縁日と沐浴とはいったいどういう意図のもとに始められたのでありましょうか。全くお互いに出会うこともないような人達が、五里、十里といった遠方から集まってきて、年に一度顔をあわせるのです。お互いの楽しいこと苦しいことを語り合います。村では手に入らぬ日用品を買って帰るのです。陰暦白半及び黒半１１日のエカーダシーの斎戒断食は何故行われるのでありましょうか。月に一、二度断食をすれば身体が清浄になるからなのです。ガンジス川に沐浴する際、最初頭に水をかけてから足を踏み入れるように定められているのは何故でしょうか。それは足の裏から熱気が頭にのぼって体に変調を来たさぬためなのです。ディーワーリー祭は、お祭にことよせて年に一度は家の掃除を致そうというわけなのです。この祭礼が、すなわち市役所の役目を果たすものなのです。このようにあらゆる祭礼、聖地巡礼、斎戒というものには何らかの知恵が隠されているのです。昔の人達は信仰生活と社会生活とを渾然一体となしていたのです。それが途中でまずいことになったのはそのような決りが出来た本来の理由を理解せずに、その形式を本質と考えてしまったことにあるわけです。皆様、真の信仰とは偏に神の礼拝にのみかかわることであって、今申したような事柄はみな社会的規範なのであります。それはまた時と場所に従って改められ変更されて行くものであります。第二の間違いというのは、大聖、賢人達の末裔達が、その先祖の意図を解せずして、新しい信仰をこしらえては勝手に書物につめこんで行っ

たことであります。来る日も来る日も斎戒の日になり、どこもかしこも聖地になってしまったのであります。こういったことを今一度よく見直してみると同時に、賢人、聖仙達が何故それをひろめるに至ったかを考え、時と場所とに適しいものをとり入れて行かねばなりません。社会のためにならぬこととされているものの本当は聖典に規定されていることを推し進めねばなりません。例えば、船旅すなわち、海外への渡航、寡婦の再婚といったことがあります。子供達を幼少のうちに結婚させて、精神力も体力も寿命までをも台無しにすることは止めさせましょう。一体、そういうことをする人は子供の親なのか、仇なのか。子供は体の成熟を待ち、多少なりとも学問をさせ、生活を営む知恵がついてから嫁をとらせるように致しましょう。クリーンの風習、すなわち、一夫多妻婚を止めさせましょう。娘御達にも教育を受けさせましょう。しかし、その教育も今の流行の害あって益なしというようなものであってはなりません。国家への義務や家憲を習い、夫に仕え、子供におのずと訓育を施すことのできるような教育を与えてやらねばなりません。ヴィシュヌ派の人もシャクティ派の人もあるいは、その他の諸々の宗派の人もお互いの憎しみを捨て去りましょう。今は相争う時ではないのです。ヒンドゥー教徒もジャイナ教徒も、あるいは、回教徒も仲良くしようではありませんか。カーストが高かろうが低かろうが、みな一様に敬い、その能力に従って評価致しましょう。身分の低い者を侮り不快な思いをさせぬように致しましょう。みな互いに仲良く致そうではありませんか。

回教徒の諸君もインドに住みかを定めたからにはヒンドゥー教徒を賤しむ考えは捨て去っていただきたい。兄弟のようにヒンドゥー教徒に接して欲しいものです。また、ヒンドゥー教徒に不快な思いをさせることは止めていただきたいのであります。家が火事になったなれば、兄嫁、弟嫁の妬みも捨て去って火を消し止めねばなりますまい。ヒンドゥー教徒には見られぬものを回教徒は信仰のおかげで生まれながらに身に備えているのです。カーストもなければ、飲食についての浄不浄の規定もなく、外国に出かけるにも何ら制約はないのです。しかしとても心配なのは、回教徒諸君は自分達の置かれている状況をまだ全く改めていないことなのです。今なお、デリーやラクノウには回教徒の王朝が存立していると考えている人が多数いるのです。諸君、もうあの時代は過ぎ去ってしまったのです。安逸とも強情ともお別れしようではありませんか。ヒンドゥー教徒と共に駆けましょう。一人と一人であわせて二人になるのです。昔のことはおさらばにして、ミールー・ハサンのマスナヴィー詩やアマーナトの「インダル・サバー」を読ませて青少年を台無しにすることを止めようではありませんか。「幼少より薔薇の顔(かんばせ)を愛でし我、(サアディーの)『薔薇園』の警句を空んじたことなし」という具合に、物心つくかつかぬかに容姿身形に憂き身をやつし、ガザルをうそぶくというようなありさまであります。かような空気の中で成人した者ができそこなうのは當然過ぎることではありませんか。諸君、子供にはそのような書物は全く手に触れさせないで下さい。立派な教育を与えてやって下さい。年金や宮仕えを頼りにするのは止めましょう。子供達に仕事を

おぼえさせ、外国に送り出そうではありませんか。小さい時から勤勉の習慣をつけ、箱入りの世間知らずにさせぬよう心がけようではありませんか。

ヒンドゥー教徒の諸君も互いの意見の対立に固執するようなことは止めようではありませんか。みんな仲良くすることを信条と致しましょう。インドに住む者は皮膚の色がどうであろうとも、カーストがなにであろうとも、ヒンドゥー、すなわち、印度人であることでは同じなのです。印度人(ヒンドゥー)を扶けましょう。ベンガル人、マラーター人、パンジャーブ人、マドラス人、ヴェーダーンタ派の人、ジャイナ教徒、ブラーフマ・サマージの人、回教徒、なんであろうと、お互い手と手を握ろうではありませんか。産業が発達し、富がこの国にとどまるような工夫をしようではありませんか。ガンジスが幾千の流れとなって大海に流れ込むように、我国の富は幾千の道を経てイギリス、フランス、ドイツ、アメリカへと流れ出て行っております。燐寸(マッチ)の如き小さなものまで外国から入ってくるのです。皆様がご自分の姿をごらんになるのがよろしかろう。お召しになっているマールキン（ナンキン木綿）のドーティーの布地はアメリカ製、同じくアンガーのランキラート（ロングクロス）はイギリス製であります。フランス製の櫛で髪をすき、ドイツ製の豚の脂を塗った灯芯が諸君の目の前に燃えているというようなことでございます。ある呑気者が借着をして会合に出たところ、一人が、それと気付いて申しました。「このアンガーはだれそれのものだ」。すると別の男が、「やあこの帽子はだれそれのものだ」と申しました。するとその当人は「自分のものは口ひげだけだ」と笑って答えたという。これと全く同じことなのであります。実に情ないことです。自分の用いる品物すら自分の手では作れないとはなんたることでありましょうか。皆様、もう夢からさめようではありませんか。母なる国をあらゆる手を尽して発展させましょう。ためになる書を読み、ためになる遊戯をなし、ためになる言葉を交そうではありませんか。外国製の品物、外国の言葉を頼りにするのは止めに致しましょう。自分たちの国を自分たちの言葉を発展させようではありませんか。

原題　**'Bhāratvarṣa kī kaise unnati ho saktī hai ?'**

１８７７年バリヤーのダドリーの縁日(メーラー)に際し、バリヤー協会の会合においての講演

使用テキスト：**Brajratandās(ed), Bharatendu Granthāvalī III, Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Kāshī,1953**

バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ（１８５０－１８８４）　バナーラス出身。ヒンディー語の詩人、戯曲家、ジャーナリスト、社会活動家として活躍。ヒンディー語の散文の確立、近代ヒンディー文学の開拓者として著名。

プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラ

「アーラメ・タスヴィール」

「アーラメ・タスヴィール」は、当市カーンプルから発行されているウルドゥー語の週刊誌であるが、これの編集氏は罪もない牝牛と牝牛保護会（ゴーラクシャー・サバー）とに対して一体何の恨みを抱いているのか知らぬが、当市で牝牛保護会の活動がなされる度毎に、得手勝手な言いがかりをつけては、おとなしいヒンドゥー教徒に嫌なおもいをさせている。

小子は、聖典コーランの章句の釈義について云々できるほどのアラビア語の専門家ではないが、ヒンディー語・ベンガル語・ペルシア語の典籍に照らし、また、良識あるマウルヴィーたちより耳にしえたことよりして、教祖マホメットが全く無益なことにでたらめを言ってまでも異教徒に対し悪事を働き、異教徒との心の連繋すら断たねばならぬと仰せになったとは認めるわけには参らぬ。ヒンドゥー教においては、牝牛を保護することが至上の法（ダルマ）とされており、またイスラム教は牛を殺さずんばイスラム教にあらずとは、いずこにも記されていないことは周知の通りである。しからば牝牛保護に反対してヒンドゥー教徒に意味もなく精神的な苦痛を与え、ヒンドゥー・イスラム両教徒の対立を激化させる以外に一体何を得るというのであろう。

牝牛保護に関連した何らかの動きがあると必らず、「アーラメ・タスヴィール」にはそれに反対する記事が掲載される。ために、多数のヒンドゥー教徒が私のもとへやってきては、涙を流さんばかりにして、一筆書いてくれ、という。しかし、わが国の人間が、慈悲とか法（ダルマ）とか言うことがあっても、それはほんの二、三日限りのことであって、後刻自分に少しでも面倒な事柄が出てこようものなら、もうそれまでになってしまうことは、今までしばしば思い知らされてきたところである。また、願うところではないが、だれかに災厄のふりかかってきた場合、だれか他人がその人の苦労をわかちあうなどということは、これまでただの一度も目にしたり、耳にしたことはない。まあ、そのように考えて、これまではそのようなことで泣きついてくる連中に、つまらぬ口論をしたところではじまらぬではないか。それよりも牛舎を建て、牝牛保護会でもつくったがよいではないか、と言ってまぎらわしてきた。それ以外に答えようもないし、それが本当のことだと思う。非力無援のブラーフマンが口角泡を飛ばす姿はいただけない。したがって、4月6日付の同誌に対しても反駁は致すまい。ただ、同じ市の住人というよしみでかような記事は何の益にもならぬとだけ、尋常に申しておきたい。

そもそも牝牛が命拾いしたからとてイスラム教徒には苦い牛乳しか出さぬこともあるまい。他市のイスラム教徒は、高位高官・学者の多くが牝牛保護に協力している。だからといって、その人たちは罪業を重ねているわけではなく、逆に同胞に協力して善根を積

んでいるのである。政府すらあからさまには牝牛を殺しはせぬ。見識あるイスラム教徒で、今までに牝牛保護（ゴーラクシャー）に反対した人を知らぬし、また、下賤の生れにあらぬ限り、イスラム教徒といえども牛肉にかつえているわけでもない。それなのに、「アーラメ・タスヴィール」氏のみが親の仇にしておられるのはどういうことなのか。

「今週、若干のヒンドゥー教徒は牝牛保護会の仕事としてあちこちの街頭に立って、激越な口調で、『われわれが牛にかわって犠牲になろう』と演説していた。」と言われるが、牝牛保護を説くのはヒンドゥー教の根本であり、政府も各人が自らの宗教にのびのびと従うことを望んでおり、また、牝牛保護を説くことが、他宗を侮蔑したり、他宗に害を及ぼすものでないとすれば、街頭に立って演説するのが何故悪かろう。激越な口調が問題になるとしても、この近辺の人はまだ演説の仕方すらわきまえていないのであるから、激越といったところで、たかが知れているではないか。ヒンディー語やウルドゥー語の記事の見よう見まねで、ああだの、こうだのと言うのが精一杯の連中である。慈悲とか法（ダルマ）とかを僅かでも考えることのある者が、その言葉につられて、それ相応の寄付をする程度でしかない。たまたま演説が名調子で、それに感激する者が現われれば、結婚式と同じで、身分不相応な大枚を投げ出すことがあろうが、牝牛保護の熱狂というのもたかだかその程度でしかない。その上、そのような話は今までに見聞きしたためしもないのであるから、「激越」とおっしゃる意味が小子にはのみこめぬ。

「おそれ多いコーランの章句を間違えて誦し、かつ空言を言ってイスラム教徒にむかい、『汝らの宗教では牛肉を口にするのは誤りとされている』と差出口をきく。」アラビア語を知りもせぬ者に、コーランの章句どころか、ありふれた一言ですら正確には発音できぬことは判りきっている。それに、インド中を探し歩いてみたところで、アラビア語を知っているヒンドゥー教徒やサンスクリット語を知っているイスラム教徒を見つけ出すのは至難のわざなのだ。かような次第だから言葉を間違えるということは起り得ぬことではない。だが、牽強附会とは習いもせぬ言葉については不可能事であろう。アラビア語を学んだ人から聞いたことをそのまま口にしたり、文字にしたりするのが、ヒンドゥー教徒には許されぬと言われるのであろうか。それは高名なマウルヴィーたちより聞いたことでもあり、高貴なイスラム教徒についてこの目で見たことでもある。また、そういう人たちは牛肉を全く口にされない。このことからだけでもイスラム教徒が牛肉を食べるべき絶対的な要請を受けていないことがわかるではないか。

「今週はまた、この牝牛保護に関連した芝居も幾つか演じられた」とあるが、これはそれこそ根も葉もない嘘言である。自分の住んでいる市のニュースを編集者ともあろう者が偽って報ずるとは一体何事であろうか。言葉をもてあそぶ者と言わずして何と言おう。芝居は密室において演じられるものではない。数百の観衆の前で公会堂にて演じられるのである。今週、いや、今月は牝牛保護に関する芝居はたった一つ、M・A・クラブが演じたにすぎぬ。

「3月31日、仔牛を一頭ひっぱってきてイスラム教徒の少年数人にあらかじめ暗誦

させてあった牝牛讃歌を歌わせた。」とあるのも全く根拠のないことである。パンチ・クラブ（二人のブラーフマンを除いてはみなイスラム教徒である）が牛讃歌を歌ったのである。その際、このクラブの高邁な精神及びヒンドゥー・イスラム両教徒の友愛を強めんとする意欲がありありと窮われ、観客も牛の苦難を聞いて悲しむばかりでなく、同クラブの友情に打たれたのであった。M・A・クラブからはバーバー・ハルナーム・シン氏、シュリーバーラト・マノーランジャニー会からはプラタープ・ミシュラ氏、それに観客の一人が、心底から感謝の意を表したほどであった。まことにその働きは称賛に値するものである。「アーラメ・タスヴィール」は誤って、パンチ・クラブのメンバーを少年としている。１２、３才の少年というが、それに該当するような者は一人もいなかった。もし少年が居たとすれば女装して出たはずだ。それどころか、そのうちの二、三人は教養あるウルドゥー語の詩人で筆者よりも年配ではあっても若輩ではない。そういう人を少年と呼ぶのは何故なのだろうか。この人たちに暗誦させて歌わせるとは見当違いも甚だしい。他のクラブの人が教えこむとか、玄人の歌手から習うなどとはとんでもないことだ。馬鹿馬鹿しさにも程がある。歌ったり踊ったりしてヒンドゥー教徒に媚びてほうびをもらうのがこの人たちの仕事でないことは今更言うまでもないことではないか。したがって、理性ある人が、その人たちから牝牛讃歌を公衆の面前で歌うのは、ひとえに友愛の精神と団結融和の気持に発した行為であるというのも当然ではないか。

「このような状態が続けば、イスラム教徒の間に不安がつのる」と言われるが、ここカーンプル市は幸いに、ヒンドゥー・イスラム両教徒とも争いを好まぬ。分別あるイスラム教徒もヒンドゥー教徒も、イスラム教徒の一部にヒンドゥー教徒を喜ばせるために時間と金とを惜しまぬ人々が現われたこと、また、ヒンドゥー教徒の一部もそれに感動してイスラム教徒に衷心より感謝の意を述べるようになってきたことを嬉しく思っていることであろう。良識ある人は常にかくあらんことを祈っているのである。いろんな宗教を信奉する人々が意見を一致させるということは誠に喜ばしいことではないか。両教徒はもとより、無神論者すら、善良な人であれば、これを喜ぶに違いない。しかし、両教徒の間に憎悪をかきたてることを専業となし、あるいは、おのが身内のみしか認めることのできぬ偏狭な手合いは論外である。同誌は「どのような結果になるか見てみるがよい」と言うが、未来については神のみの知り給うところである。だが、敢えて言うならば、このようなことが今後も続けられるならば、牝牛保護に関して民衆の関心もたかまり、両教徒の友愛も堅固になり、市は栄え、名をあげることになろう。また、政府の政策と民衆愛護の精神が明確になることであろう。大した成果もあがらぬとなれば、カーンプルは他所の人たちから嘲られることであろう。目先のきかぬ大衆を争いに駆りたてる者は、現世・来世にわたって、神からその報酬を授けられよう。「生じくる結果」は以上のうちのいずれかであろう。

最後に筆者は、同業者に対し、新聞や雑誌の本分は友愛を増し、発展を支援することである、と忠告しておこう。ヒンドゥー・イスラム両教徒とも母なるインドの両腕なの

であって、片方がなくてはお互いやってゆけぬのである。社会を構成する不可欠の一員なのである。そこに両者の安寧が存し、右腕で左腕を切り落しても、あるいはその逆をやってもしあわせになれぬことをよく考えてもらいたいと思う次第である。

Brāhmaṇ 第４巻 第１０号 (１９８８年４月１５日)
原題 **'Ālam-e tasvīr'**

これは一体どういうことか

お寺にはブラーフマンでさえ、斎戒、沐浴をすませてからでなければ立入りを許さず、神像や親族の死骸にふれれば、たとえ高貴な種姓のヒンドゥー教徒であろうとも顔をしかめてみせるような貴方たちが、着物どころかはては経かたびらにいたるまで、異人の職工が織り、異人の仕立屋の爺さんが唾ひっかけて縫うたものの御厄介になっておられるようじゃが、これがヒンドゥーの尊ぶ浄と関係ありと仰せになるか。神像に愛でられることや死者の昇天が浄に依るとお考えであるならば、わが国の職工もヒンドゥー教徒の仕立屋も死に絶えたと仰せになるつもりか。さりとも、異人や異教徒に魂を奪われて、同胞の技術がどうなろうとも構わぬと言われるか。

また、家の中に犬や鳥が骨を持ちこんだり、あるいは、食事の最中にだれか肉のことでも口をすべらせて言おうものなら、やはり眉間にしわをよせられる貴方たちが、骨や血の混った舶来の燐寸や白砂糖を、それもどんな畜生のものか知れぬのに、お祈りの際には灯明のそばに置いたり、御馳走の中に用いて食べたりして平気でおいでになる。これでも自分は食物にはうるさいと言われるのか。わが国には燐寸製造法をわきまえた者は死に絶えたとでも言われるのか。同じく粗糖の製法も絶えてしもうたのか。マトゥラーのＲ・Ｌ・バルマン・カンパニーを扶けたり、石鹸(サーブン)や燐寸工場の株を一つでも二つでも買ったり、バナーラスの砂糖を用いたりすることすら貴方たちにはできぬ相談だと仰せになるのか。

さらにまた、わが国の貧困と救済について講演する時には、聴衆の鼓膜も破れんばかりに叫ぶ。文を綴るに筆をとれば植字工も仰天せんばかりの勢いでありながら、おのが身体は、頭のてっぺんから爪先まで舶来の衣装にくるまっておる。家の中には、一文ばかりの縫い針が舶来なら、薬や、酒や石鹸、おまけに犬まで舶来という。ただひとつの国産のものはといえば肌の色。一体こういうことでわが国の貧困をなくすおつもりか、それともただ国を振興させるお偉方の一員として名を連ねるおつもりか。さてはまた、これらの品々はわが国では手に入らぬのか。製造が不可能なのか。それとも値がはるのか。長持ちせぬのか。左様左様、国産のものは物騒だということでございましょう。貴方はジェントルマン、すなわち御上品な方であらせられますから。

ところで、貴方たちは自然（ネーチュア）の摂理及びそれの全幅の信憑性を主張してやまぬ御仁であらせられますので、一つお尋ね致そうと思う。一国もしくは一民族が今日ある状態は、今後この大地の破滅の日まで続くものである故、それを改善せんと努めることは罪悪であり、かような罪悪を犯す者に立向かうのが自然の最高の原理であり、忠誠心の根源、道義の真骨頂である、と自然律の第何条に記してあるのかお聞かせ願いたいものである。また、貴方たちはヒンドスターンにお生まれになったのか、どうかも。飲食、礼儀作法、婚姻はみなヒンドゥー教徒かイスラム教徒のものに従い、死ねばこの国の水や土にかえられる身ではござらぬか。ペルシャ、アラビア、あるいはイングランドに行ってみられるがよい。だれ一人口もきいてはくれるまい。それというのも貴方たちは、言葉・服装・信仰・食事・娯楽にいたるまですべてのものをその地の人とは異にしておられるからである。おまけに貴方たちがお生まれあそばされたところにはだれ一人偉い学者も大金持もいないのだから外国に行って地位を得るなんぞ望めそうにもないという次第。それにも拘わらず、こういうことは百も承知の上で、警察（プリス）の制服を着たり、バッジをつけたりぶらさげたりすると、早速同胞を苦しめ、つまらぬ陰口をきき、口にすべきでない悪口を浴びせたりなさる。いやそれどころか時には鞭打ったりして利口ぶられるのはどういうことなのであろうか。おのれの職務に励むのも、上司の機嫌をとるのもよかろう。だが、しかし、貴方の振舞いは如何なる法律の定めるところでもないことを覚えておかれるがよい。サーハブ・バハードゥル（白人旦那）が本国に引揚げて行く時には貴方たちを一緒に連れては行かれませんぞ。貴方たちの皮膚の色も特別割引きしてもらえそうな代物じゃありませんからな。宮仕えは根無し草と変らぬもの。故に、それを頼りにするのは見当違いと言うものでござる。万が一、明日にもなにか間違いを起して首をきられようものならだれに頼って糧をお求めなさるつもりか。困ることがあった時、だれに話して借金なさるおつもりか。苦しい時、困ったり職を失ったりした時にどこのだれにすがりつかれるおつもりじゃ。やはりそれは、今この脅し、威張り散らし、わが意のままに蹴散らし蹴飛ばしておる相手のインド人であろうが。そうなった時、貴方たちは一体どういう心持ちになられるものであろうか、考えてみられるがよい。

さらにまた、貴方たちの上にはまだお偉方がおいでになる。インド人はたとえ能なしであろうとも、おのが悲しみを語る力は持っておる。このインドでは多数の人が貴方に味方すると仮定しても、ここからイギリス、イギリスから天国に場所を移せば、人は貴方への愛情よりも正義を重んじられるのである。女王様（ヴィクトリヤ女王のこと）の御威光あるいは大神の不動の掟が畏るべき何物かであるとするならば、貴方たちは如何に左様な勝手気侭な振舞いをなさるのであろうか。それよりも、人から何時までも忘れられずに感謝されるようなことをなさるのがよいのではありますまいか。

お尋ねしたいことは山ほどあるがまずはこれにて筆をおこう。

Brāhmaṇ 第７巻　第１、第２号　（１８９０年８月、９月）
原題　**'Yah to batlāiye'**

農村へのわれらが務め

ここ２０年ほどわが国には改革がやかましく叫ばれて来ている。宗教、社会、政治をめぐる１カーストのみのものから多くのカーストを含めた大小の集会、啓蒙家、あるいは新聞雑誌の出現等はみなこの同じ願いに発するものである。それらはまだほんのわずかな成果しか収めていないし、その見通しもさびしいものであるが、いつの日か必ずや何らかの成果をもたらすことは疑いのないところである。民衆の志向が旧套を脱し何らかの新しい道に進みはじめるならば、やがて天に向っての向上、さもなくば、地の底への転落へのいずれかが明白になるものである。かように考えてみれば、過去数百年間、転落に転落を重ねて来たのであるからこれからは向上以外にあるまいと期待するものである。ある状態がその極に達するということは次の（その逆の）状態の開始を意味するものであることは、自然の理法である。これよりわれわれは向上・発展のみを期待すべきであって、また多数決制による団体等の設立は今後の発展の手段となろう。しかし、この手段の実態を眺めてみるに、それらは未だわずか大都会に限られたままである。農村にたとえ及んでいるものがあるとしても、それは無に等しいと言っても差支えなかろう。筆者はベンガルとか、ボンベイとか、マドラース等著名な州の農村に関する正確な知識を持合わせて居らぬが、もしかすると、それらの地域では農村の人々も都会人同様に各自の権利と義務について知っているかもしれぬ。

ところでわが北西州及びアワドはあらゆる面で最低線をさまよい、都会ですらもどれほど大声で叫んでみてもいざとなると何の反応もないところであるだけに、農村の状態はまことにみじめなものとなりつつある。もしも、愛国の士が早急にそちらに目を向けねば、都会でいかほどわめいたり叫んだり、行動しようとも、それは九仞の功を一簣に欠くことになろう。われわれが改革しようとしているこの国土はわずかばかりの大都会に分割せられているのではない。一つの都会の周辺には大小の農村が数多存在しているのであり、その人口は都会のそれをはるかにしのいでいるのである。随分古くからの都会に住みついている人々についても調べてみれば判るように、先祖代々引続き都会に住んでいるという家庭はごく僅かしか存在しないのである。大多数の人は、その父親あるいは祖父の代、そうでないにしてもせいぜいその一代か二代前まではどこかの村に住んでいたのであり、また、当代の人も今なおその村あるいは近辺の村と関係があるといった塩梅である。人口稠密の大都会にしてこの調子であるからどの大都会の人口よりもその近隣の農村人口の方が多いと言っても不思議はなかろう。これをお認めにならぬのであれば、近日行なわれる国勢調査においてどちらが正しいか確かめてみられるがよい。僅かばかりの人が住むところに、時代の先端を行くあらゆる手段が容易に得られ、自らまた伝統によりあらゆる言語の内容を理解することが出来、また、福利、将来の発展・進歩のためにはあらゆる工夫がなされるのに反し、多数の人口、いや全人口の四分の三以上もの人が住み、新らしい洗練された生活様式についての知識もほとんど到達してい

ない農村に対して改革者たちが目を向けていないということは残念なことである。これらの地に説教しに出かけて行く者があるとしても、それは、インドの宗教並びにインドの民族精神の破壊をその主眼とする宣教師（パードリー）の会でしかない。国家及び民族の幸福を願う者が、着物を着替え、街の一劃から一劃へ行ったり、あるいは、汽車に乗って都会から都会へ場所をかえたり、英語あるいはアラビア語混りのウルドゥー語での講演で拍手してもらって仕事を終えて、その務めを果したとしてよいものだろうか。かような方法では、たとえ何らかの効果があがったとしても、それはその講演を聞かずとも既にそれについての認識を持っていたようなほんの限られた一部分の人にしか過ぎぬ。しかし、筆者はもちろんのこと、働きかけをしたその当人すら、効果があったとは言えまい。それというのも改革の対象にした人々は、全人口の四分の一にも及ばぬ。たとえ四分の一あったとしても、以前から改革されつつあった人たちである。しからばいわゆる改革者たちは一体、国に奉仕しているのか、それとも単に自分と同類の人たちの讃辞をかき集めようとしているのか。都会の中で、たとえ百の新聞を発行し、一千もの団体を結成し、十万もの書物を著わし、千万の演説をぶったところで、全土の為にならず、国の隅々から心からなる感謝の言葉を報いられることはあるまい。そうするためには改革とは如何ような鳥の名かとか、愛国心とは、民族主義とは何処の畑にできる大根のことかといった程度しか考えつかず、人類の義務とはなにか。わが国の昔はいかなるものであったか、現状はどうなのか、未来に向ってなにをどのようになすべきかなどを未だ知って居らぬ人たちをまず改めねばならぬ。今日の我々の生活を子孫も続けるべきなのか改めるべきなのか、といったような知識を植えつけねばならぬ相手は大多数が金持でも学者でも思慮深くもなく、さてまた名門の出でも有能でもないが、人間にはかわりはない。もしだれかこのような人たちの理解出来るような言葉で説明するならば、すべての人に理解してもらうことができる。したがって、このような人たち如何が、わが国の興亡にかかっていると言っても過言ではあるまい。

ところが、詮なきことには、国の改革を標榜する人たちは今日に至るもこういう人々には一瞥だに与えないのである。これら地方の人々は都会人に比べて正直であり、非常に恩義に篤く忍耐力に富みさらに意志堅固である。善と思う事、自分の味方だと思う人や集団、義務と知った仕事に対しては、欺されぬ限り身も心も財も捧げつくすものである。しばしば命すら惜しまぬことがある。また、ありふれたこととして、暑かろうが寒かろうが、たとえ雨に降られようが一日に二十里も三十里も平気で歩いて行くし、他人の名誉や悩みの解決のために、あるいはいざという時には人に罵られ侮られようとものとも せぬ点においては都会人よりはるかに秀でているのである。これこそあらゆる仕事を完遂する資質なのである。しかし、仕事がなんであるのかは偉い人にもなかなか解るものではないのだからこの人たちに解ろう筈もない。特に今日の如く国の何処を眺めて見ても、貧困ばかり目につき、食べることに追われている現状では、頭の働きも意の如くならぬのである。かような現状において、小学校も大学もその姿さえ拝んだことな

く、名演説家の言葉を夢の中にも聞いたことなく、政治家、社会改革運動家、時事に通じた人々の門戸を訪れる力も持たぬ人々が独力でそれを理解できるものであろうか。左様、もしも改革者諸君が都会の路地での遊歩への執着心、きらびやかな服装をした友人との談話に酔いしれる癖、ヒンディー語を口にし、耳にすることすら嫌悪することなどを捨て去り、暇を見つけては農村の人々のところへ赴き、その悩みを取除いてやったり、真心をこめたやさしい言葉でこれらの人々に、自分たちのなにであるか、その権利、義務の重要さを説くことを引き受けるならば、改革者諸君の考えが実行に移され満足すべきものとなるか否かを多日を要せずして知ることができよう。人的、物的に今日諸君が受けている協力の倍のものが得られることを確約する。田舎の昔風の人たちは垢抜けのせぬ着物こそ身にまとうているが、気前のよさと熱情では、クルターや洋服を着て御立派な身なりの都会の協力者よりも勝っていることが判ろう。それにその人たちに協力する人の数も誠実さも都会のそれを凌ぐものである。ただ、この人たちは新時代の動きをほとんど知らずにいるだけである。警察署長はインド総督ほどの力を持っているわけではなく、ちょっとしたことにつけこんで脅しては勝手気侭な振舞いをすることはできぬこと。署長の上には、人々の願いを聞き入れ、証拠があれば正しい裁判により、空想しているような恐怖を除去してくれる上司がいること。役人は恐ろしくて自分の悩みや心配を打ち明けられぬような化物ではないこと。用水路の水を田にひき入れるために税金を納めているからには、あるいは役所へ出すべき費用の支払いを済ませているのであれば、さらになにがしかを差し出すことは誤った行為であり、そのような際には上司に嘆願するのは何の罪でもないこと。婦人は山羊や羊ではないのであって、それぞれ男と同じ権利を持つものであるから、婦人を侮ることは現世及び来世にわたる罪悪であること。女児が生まれたことすなわち不幸の証拠ではなく、似合いの家庭に嫁がせるのは悪ではないこと。ただ心の迷いからのみあわてふためくのは馬鹿げていること。このようにまだ理解されていないこと、あるいは真に理解されていないことが沢山あるのだから、これらを説いて聞かせるべきである。もしだれかがこのような労をとるならば、民衆は大いに感謝しようし、いわれのない苦しみから解放されて熱誠こめてあらゆる目標の成就に協力を惜しまぬであろう。（アーリア・サマージの）ダヤーナンダ師の教えが及んだ村の人々は、勤勉、熱意、それに意志の鞏固さではだれにも劣らぬことを明確に示して見せたのである。社会問題、政治問題についての運動家たちは何故にこの田舎の人々に働きかけぬのであろうか。解せぬことではある。野原の清浄な空気、混り物のないギー（バター）や牛乳、自然の眺望、無垢な田舎の同胞に交り、その向上に努め、またその協力を得て自分自身の目標に立向かうことは少なからぬ喜びではあるまいか。ここで農村と言うのは汽車からも役所からも舗装道路からも二十里以上離れた人々の住みかのことである。そこには神の恵みにより今なおサティヤユガ（正法の時代）が残存している。もしわが愛国の志士たちがそこへ赴き、その義務を果すならば、この人たちにも当人たちにも大きく益することであろう。大集会で長広舌をぶつ人たちもこのことについて自分

なりに考えてみてくれるであろうか。

Brāhmaṇ　第７巻　第６号　（１８９１年１月１５日）
原題　**'Grāmoṃ ke sāth hamārā kartavya'**

使用テキスト: **Vijaya Shankar Malla(ed.), Pratāp Nārāyaṇa Granthāvalī (1), Nāgarīpracāriṇī Sabhā ,Kāshī Vi.2014**

プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラ（１８５６－１８９４）　カーンプル出身。同地で主としてヒンディー語のジャーナリストとして活躍。「ブラーフマン」誌を刊行。詩、戯曲などの作品もあるが大半は随筆、評論。

訳　古賀勝郎（大阪外国語大学外国語学部）